

教科名	対象学年	使用した資料（参考にした資料）	TYPE
英語	中学1年	授業アイデア集【中学校版】p47, 48	Ⅲ
授業内容	既習表現を活用して、状況や場面に応じた英語で表現しよう。【帯活動】		
身に付けたい力	状況や場面に応じて適切な英文を組み立て表現する力。		

教科名	対象学年	学校名	課題の見られた問題	TYPE
英語	2年	本庄市立本庄東中学校	25年度 県	Ⅸ Ⅲ

授業の内容: 既習表現を活用して、状況や場面に応じた英語で表現しよう。【帯活動】

身に付けたい力: 状況や場面に応じて、適切な英文を組み立て表現する力。

【事例1】絵の描写 「絵で示されたものが何かが分かるように伝えよう。(speak in)」

《活動の目的》
目標文の文構造や文法知識の習得に終わらず、伝えたい内容を意識して目標文を使う。(活用する)ことで定着を図る。

《実際の活動場面》(例) 後置修飾(不定詞の形容詞的用法)

【授業のポイント①】
第1ヒントを“This is something to+動詞の原形”の形で話すことにより、目標文の定着を目指す。

Um...???

This is something to... write.
It's long. I used it... when~.

《手順》

- ① ペアを作り、一人は黒板に背を向ける。
- ② ヒントを出す人は、黒板に映し出された絵を見て、相手に英語で説明する。(説明時間は20~30秒)
- ③ 正解できたら、毫席する。
- ④ 役割を交代する。

←書える人

←ヒントを出す人

《工夫点》

- ・ゲーム形式により、楽しく英語を話せるようにする。
- ・時間制限や提示する絵によって、難易度を調整する。
- ・目標文に則り、多様な英語表現を引き出すことで、既習表現の活用につなげる。

【授業のポイント②】
☆さまざまな文法事項で活用することができ、3年間を通した帯活動になる。

(例) 教科書の登場人物あてクイズ

【入門期】単語による説明 boy, soccer, student.
【1年生】簡単な文による説明 This is a boy. He likes soccer.
【3年生】関係代名詞を使った後置修飾など This is a boy who likes soccer.

【事例2】英文日記 「昨日行ったことについて英語で日記を書く。(writing)」

《活動の目的》
継続して英文日記を書くことで、書くことに慣れるとともに、徐々にレベルアップを図り、まとまりのある英文を書く力を育成する。

《事前の活動》

① 不規則動詞の動詞形練習

take, took, taking

- ・リズムボックスやメトロノームに合わせて、口頭でテンポよく練習する。
- ・フラッシュカードを活用すると便利。

② 書く前のインプット活動

(例) What time did you get up this morning?
(例) I got up at six thirty this morning.

「考えるようになったことを書いて、定着アップ」

英文日記で書く1文につながる。

《工夫1》ワークシートでフレームを提示

少しずつレベルアップ
ちとずりも定着させる

Var 1
③ はじめは曜日・日付や天気+1文など書きやすい簡単な文から始める。

Var 2
④ 事実+感想や特徴詞の活用などを設定する。

《工夫2》教科書の活用

《工夫3》家庭学習につなぐ

導入時は、書く前に①②の授業で行う。
不規則動詞(1分)→対話(1分×2セット)
→英文日記(2~3分)

慣れてきたら、英文日記は家庭学習にする。
→家庭学習にすることで、時間をかけて、より豊かな表現を引き出すことができる。

日記は毎回採択し、内容に対するコメントを書いて返却することで、正確な表現の定着につなげるだけでなく、活動への意欲付けを図る。

【授業のポイント③】
文構造の定着には、理解した絵に、その表現をくり返すことが大切。教員は動きさせない工夫と、生徒がミスを恐らず互いに学び合う人間関係の構築にも気を配る必要がある。

【授業のポイント】

○第1ヒントを”It is+名詞.” 第2ヒントを”It is+形容詞”の形で話すことにより、形容詞の用法の定着を目指す。

【授業の様子】

・黒板に提示された「もの」を黒板に背中を向けているパートナーに英語で説明する。



【留意点】

- ・事前に活動に役立つ形容詞を一覧にした「お役立ちシート」を配布して練習した。

【効果】

- ・” fruit” ” animal” ” red” ” sweet” というように、知っている言葉を使って物事を単純な文で複数言えるようになった。
- ・最初は「お役立ちシート」を確認しながら表現していたが、次第にシートを見ずに表現したり、” square” ” round” など多様な形容詞を使用したりすることができるようになった。
- ・上位層の生徒は「なるべく少ない文の数で挑戦してみよう」と伝えたところ” It’ s a fruit. It’ s red.” という2文から” It’ s a red fruit.” と形容詞と名詞を組み合わせて1文で表現できるようになり、語順についても正確な表現力をつけることができた。
- ・各ペアが表現したヒントを共有することで、生徒の使用する形容詞が自然と増えた。” It’ s yellow.” から” Monkeys like it.” といった表現の広がりも見られた。
- ・継続的に活動を進める中で、自分なりに英語で表現する、自ら必要な形容詞を調べる、相手の表現を理解しようとするなど、学習意欲の向上が見られた。

【留意点】

- ・正解を出すことにこだわり、ジェスチャーや日本語を交えて表現をしてしまう生徒が見られる。この活動は「形容詞を用いた表現を使えるようになること」が目的であることを確認し、口頭表現を中心に伝えられるよう指導する。
- ・活動前に「お役立ちシート」を用いて確認する際、「簡潔に伝えること」を指導し、1つのものを様々な形容詞を用いて表現することを徹底する。

【授業のポイント】

○さまざまな文法事項で活用し、年間を通しての帯活動とする。

【効果】

- ・既習事項を新出事項と結びつけて表現の幅を広げる指導が可能となった。
例) ” It is～.” から” They are～.” など、単数から複数の表現へ
一人称から二人称、三人称の表現へ
be 動詞を用いた表現をもとに、一般動詞、三人称単数現在形の表現へ
- ・この活動を継続して行っていくと、互いに助言し合うことができるようになりすべての生徒の表現力の向上が図られた。
- ・上位層の生徒は相手に分かりやすく伝わるように多様な表現を用いたり、別の表現に言い換えたりなど、工夫して伝えられるようになっている。
- ・低位層の生徒は、間違いを恐れず自分の知っている表現で伝えようとしたり、わからない表現についてパートナーに聞いたりなど、学習の意欲が高まっている。
- ・全体で確認することで表現の幅が広がり、生徒たちが1人では思いつかなかった表現も自然と使えるようになっていった。

【留意点】

- ・” It’ s～.” でこの活動を始めたため、条件反射的に主語が人や複数の場合でも” It’ s～.” と言ってしまいう生徒が見られる。活動の前後に全体で本時の活動で用いる表現事項については確実に確認を行いたい。